

平成二十二年三月二十六日(金)

第四〇一回 史跡めぐり

隣の町を歩こう

日光道中「草加宿」「松原並木」

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四〇一回 史跡めぐり

隣の町を歩こう

日光道中「草加宿」「松原並木」

● 日時 平成二十二年三月二十六日（金）

● 集合 東武線草加駅東口 午前八時三十分

● 参加費 五〇〇円

（資料代・保険料）

● 案内者 常任理事 篠原陸郎

コース（歩行約6キロ）

<草加駅東口>

- 八幡神社
- 藤城家
- 道路元標
- 歴史民俗資料館
- おせん茶屋公園
- 東福寺
- 青木石材店
- 神明宮
- おせん公園
- 河合普良像
- 札場河岸
- 正岡子規句碑
- 甚左衛門堰
- 望楼
- 松尾芭蕉像
- 日光街道碑
- 矢立橋
- ハーブ橋
- 百代橋

<松原団地駅>

<12:30分頃解散>

松原並木「矢立橋」



日光道中

- 1 八幡神社
- 2 藤城家
- 3 道路元標
- 4 歴史民俗資料館
- 5 おせん茶屋公園
- 6 東福寺
- 7 青木石材店
- 8 神明宮
- 9 おせん公園
- 10 河合曾良像
- 11 札場河岸
- 12 正岡子規句碑
- 13 基左衛門堰
- 14 望楼
- 15 松尾芭蕉像
- 16 日光街道の碑
- 17 矢立橋
- 18 ハーブ橋
- 19 百代橋



草加市

- ・市制施行 昭和33年
- ・昭和37年 東洋一のマンモス団地「松原団地」完成
- ・町名改正記念碑

草加町は、大正12年と昭和2年まで耕地整理が行われ、昭和6年5月1日に字の名称と区域を改正した。これが町名改正である。

町名改正記念碑

我カ草加町ハ寛永七年初メテ奥州街道ノ宿驛トナリ昭和四年開宿三百年祭ヲ舉行セリ面シテ従来ノ公稱ハ吉笹原 谷古宇 南草加 北草加 原島 東立野 宿篠葉 彌惣右衛門新田 與左衛門新田 庄左衛門新田 太郎左衛門新田ノ十一ナリシカ其地域モ復雜錯綜ヲ極メタリキ依テ耕地整理ノ施行ヲ機トシ新ニ字ノ名稱並ニ其區域ヲ現在ノ如ク定メ昭和六年五月一日ヨリ之ヲ施行セリ當時ノ戸口一三二三戸 六七七三人
昭和六年五月 町長 野口訓三撰
野島隆三書

地場産業

- ・せんべい
- ・ゆかた染め
- ・皮革製品

草加駅東口広場

○おせんさん

草加せんべいの伝説上の創始「おせんばあさん」がせんべいを焼いている若い女性。

○草加石清水

まちづくりの源流と河川環境向上をシンボル化したもので、山頂から水が湧き出るようになっている。

○カーソンプラザ

アメリカ合衆国カリフォルニア州市との姉妹都市交流25周年を記念して命名されたイベント広場。

八幡神社

はちまんじんじや

「草加町見聞史」によれば、享保年間（一七一六～三六）に稲荷社を祀ったのが始まりで、安永六年（一七七三）に木造八幡神像を同社に併せて祀ったことにより現在の神社名となったと伝えられる。

・七福神 「恵比寿」

・獅子頭雌雄一対（市指定有形文化財） 神社記

この雌雄一対の獅子頭は高さ83cm巾80cm奥行87cmもある大型のものである。このような大型の獅子頭は遺物も少なく貴重なもの。

舞に使われる獅子頭と比較すると大型で重量もあり、獅子の胴衣をつける穴もない。獅子頭として神に供えたものと思われる。かつては山車に乗せて曳いたという伝承が残されている。この獅子頭は江戸時代の平面的な技法によって構成されている。

女獅子の頭の宝珠に対し、男獅子には頭部に一部が岩のように盛り上がったことと彫り込まれた角がある。獅子の角としては珍しい手法であり、彫工の苦心した様子がみえる。

塗りは布着せ黒漆塗りとし、唇・鼻の穴・舌は朱漆塗り。本体は寄木工法からなり、材は檜と思われる。歯は上顎から二本の牙が出て歯の並びに変化を与える古い手法を用いている。



八幡神社



女獅子頭

ふじしろけ
藤城家 (草加市保存景観賞)

- ・明治初期の建物。(当時みそ屋)
- ・町屋(しもたや) 建築として貴重な建物。

藤城家



どうろげんびよう
道路元標

- ・埼玉県が明治4年に各地に建立したものの。
- ・この元標を基として、谷塚・千住・越谷・浦和・栗橋への距離が尺単位で示されている。このあたりが草加宿の中心といえる。
- ・明治の半ば、千住と粕壁間「馬車鉄道」が敷かれ、ここは当時の停留所があった場所。

道路元標とは

・日本では明治6年、政府は太政官日誌により各府県ごと「里程元標」を設け陸地の道程の調査を命じている。明治44年に現在の日本橋が架けられた時「東京市道路元標」が設置され大正8年の旧道路法では各市町村に1個ずつ道路元標を設置することとされていた。

・設置場所は府県知事が指定することとされており、ほとんどは市町村役場の前か市町村を通る主要な道路同士の交差点などに設置されていた。東京市に限っては旧道路法施行令によって日本橋の中央に設置することと定められていた。道路の起終点を市町村名で指定した場合は、道路元標のある場所を起終点としていた。

れきしみんぞくしりようかん
歴史民俗資料館 (国指定登録有形文化財)

- ・昭和58年、失われつつある郷土の文化遺産を収集、保管、展示するため開館された。
- ・館内には、農具・神楽面などの民俗資料、古文書・板碑などの歴史資料、土器などの考古資料など約1600点が收藏され、約150点が常設展示されている。
- ・この建物は、大正15年築の草加小学校西校舎を改築したもので、コンクリート造りの校舎としては埼玉県で一番古いもの。屋根の一部を三角形に立ち上げる意匠などが特徴で、平成20年、国の登録文化財となった。
- ・設計は草加の祖大川家の分家の子孫、大川勇氏の設計。



草加市立歴史民俗資料館

おせん茶屋公園

- ・町角修景事業として神明一丁目の児童遊園を改修した小公園。
- ・昭和62年3月に完成。
- ・旧日光街道に面し、かつての宿場の赤囲気をただよわせる。
- ・名前は草加せんべえいの伝説上の創始者「おせんさん」にちなむ。
- ・昭和63年、建設省（現国土交通省）主催の第3回手づくり郷土賞
- ・「小さなふれあい広場30選」に選ばれた。
- ・かつて草加町役場、鳩ヶ谷警察派出所などのあった場所である。

東福寺

とうふくじ

- ・松寿山不動院東福寺 新義真言宗習山派
- ・慶長11年（一606）に、草加宿の祖・大川國吉（ナシキ）によって創建され、僧・賢宥が開山したといわれている。
- ・本堂は明治年間にわら苺から瓦葺になり、平成5年には大規模な改修が行われた。
- ・境内の墓地には大川國吉の墓がある。
- ・山門・本堂外陣欄間・鐘楼は市の指定文化財で草加八景の一つ。

山門



- ・この門は四脚門（よもぎもん）（四足門（よもぎもん））といわれ、本柱（丸柱）の前後に控柱（丸柱）が四本立つことからいわれる。
- ・江戸時代の木割書（きわりがき）によって造営されているが、一部手法は桃山頃になつた木割書「匠明（しやうめい）」と規を一つにしている。



鐘楼

三結の松

- ・この鐘楼は、石積みの基壇上に立ち、柱の間2.7mの方形。
- ・総檼（そうせき）は立川流を基本とし、彫刻は江戸に近い関係で、当時優秀な技法が見られ、基壇に「文久二年七月再造立（一八六二）」の刻銘がある。
- ・この建物は、当時の優秀な工匠（かむい）によって造営されたと推定され、貴重な寺院建築物である。

三結とは
 ・古代インドの武器で、のち密教で煩悩を打ち砕く仏の智慧を象徴する法具。
 ・両端が三ツ股になった、細長く手に握れる大きさの金剛杵。

- ・この松は、お大師様が真言宗が広まることを祈って中国より三結を投げたところ、高野山の三栗の松にかかり、以来この松を「三結の松」と言う。
- ・なお、この落葉はお守りとして免許証や財布にいれていきます。
- ・木から直接抜くと木が枯れることがあり、その抜いた人にわざわいが行きます。

○ 大川図書



大川図書の墓

大川図書 (文、草加ペンクラブ)

- ・ 図書は平氏の流れで、相州にすんでいた。小田原の北条氏に仕えていたが、落城の時放浪の身となり、岩槻城に立ち寄って年月をおくっていた。
- ・ 家康が天下を統一した時、旧友の伊奈備前守のはからいで谷塚村に敷地をもらい、その後、篠葉村(現井天町)に移り住んだ。
- ・ その頃、秀忠が隅田川から舎人領の御殿に鷹狩りに来たが、草ぼうぼう、沼びようびようとして馬を進め難く、あらたに道をつることを命じた。
- ・ 図書は近郷の民力を集め、カヤを刈り、細枝をうち敷き、沼を埋め、丘をならして道を平らにつくり上げた。秀忠は大いに喜び、「草を以て沼をつづめ、往還の心安きこと、これひとえに草の大功なり。このところ草加というべし」との上意があった。
- ・ それ以来、草加村と言うようになった。
- ・ その後図書は慶長11年(一六〇六)、近隣の九ヶ村を説得して新田を開墾、奥州街道の宿駅を開くことを幕府に願い出、草加宿を造成したと伝う。
- ・ また図書は同年、東福寺を創建した。その墓が東福寺の裏の大川家累代の墓所にある。墓は遺言により水戸の方角(北)を向いている。水戸様に礼をつくすためだといわれている。

● 神明社

- ・ 神明神社の祭神は、大照大神で、御神霊石も祀られている。
- ・ 当社は与左衛門新田の名主吉十郎の祖先が、元和元年(一六一五)に宅地内に小社を建立したことに始るといわれる。
- ・ それから約百年後の正徳三年(一七一三)に、この地へ移され、草加宿の総鎮守となった。
- ・ この頃から、五と十の付く日に六斎市が生まれ、大変な賑わいをもてたと言われ、このことから、この神社の別名を「市神・神明宮」と呼ばれている。
- ・ また幕末には、神職の薬美濃とその養子・伊が、宿の子を対象とした寺子屋を開いた。

● 高低測量凡号(水準点)

- ・ 明治九年、一年間かけて東京・塩釜間の水準測量を実施したとき彫られたもの。現在の水準点にあたる。
- ・ この石造物は神明宮のかつての鳥居の礎石で、当時、記号を表示する標石には主に既存の石造物を利用していった。
- ・ この水準点の標高は、4,517.1mであった。
- ・ このような標石の存在は測量史上の貴重な歴史資料といえる。



高低測量凡号

日光道中と草加宿

○日光街道と草加宿の歴史

- ・慶長元年（一五九六）年に五街道の一つ奥州街道が定められる。
- ・慶長七年（一六〇二）伝馬を義務づけた宿駅制度が設けられる。

この頃、千住～越谷間は下図のように八条・大相模を通る迂回ルートであった。



（民俗資料館ヨリ）

- ・慶長十一年（一六〇六）頃より、大川図書が中心となり新道開削が行われ、千住から越ヶ谷間をほぼ直線で結ぶ草加新道を築いた。これが草加宿の基となった。
- ・元和三年（一六一七）前年家康が没し、久能山から日光山へ改葬されると、日光参詣などで交通量が増え、人馬雜立てが間にあわなくなり、千住から越ヶ谷宿の中間に宿駅設置願いがだされた。
- ・寛永七年（一六三〇）それまでは、一村で宿場を編成できる大きな村はなかった為、幕府は複数の村が宿場を編成することを許可、千住・越ヶ谷間の「間の宿」として、九か村組合宿による草加宿が誕生し、この年、幕府の伝馬制度の公認によって、日光街道第二の宿駅となった。

○草加宿

- ・開宿当時は、戸数84戸、長さ685間（約1.3km）、伝馬人足25人、駅馬25頭と小規模だった。旅籠屋も5〜6軒、店舗は豆腐屋、塩・油屋、湯屋、髪結床、団子屋、餅屋各一軒程度で、あとは全て農家だったという。
- ・その後徐々に人口が増え、元禄期には戸数120軒になった。正徳三（一七二三）年、草加宿総領守として市神（神明宮）が建てられ、五・十の六斎市（毎月6回、定期的に開かれた市）が開かれ、繁栄するようになった。

- ・正徳四年（一七一四）年の「五人組一札」によれば、大半が店子と地借屋で、他に屋守・分地・脇屋敷と都合5000人前後で構成とあり、このころから享保年間（一七一六〜三六）にかけて急速に発達した。人馬の数も享保十三（一七二八）年には、伝馬人足50人、駅馬50頭となっている。
- ・天保十四年（一八四三）調査の「宿村大概帳」によると、当時、草加宿の街並みは、南北十二町（約1.3km）、道路脇には家屋が軒を接し、本陣・脇本陣各一軒、旅籠屋67軒（大2、中30、小35）、民家数723軒、人口は3619人だった。

これは、日光街道の宇都宮・古河など城下町を除けば、千住・越ヶ谷・幸手に次ぐ規模である。

埼玉県内の宿駅間

● 1里塚

| | |
|----------|-------------------------------|
| 江戸 | |
| 千住宿 | |
| (2里17町) | |
| 草加宿 | 地藏堂 685間 (約1.3k) 神明宮 |
| (1里33町) | ● |
| 越ヶ谷宿 | |
| (2里30町) | ● |
| 粕壁宿 | |
| (1里半) | ● |
| 杉戸宿 | |
| (1里半) | ● |
| 幸手宿 | |
| (2里22町) | ● |
| 栗橋宿 | |
| 鉢石宿(日光市) | |

おせん公園

○せんべい発祥の地碑

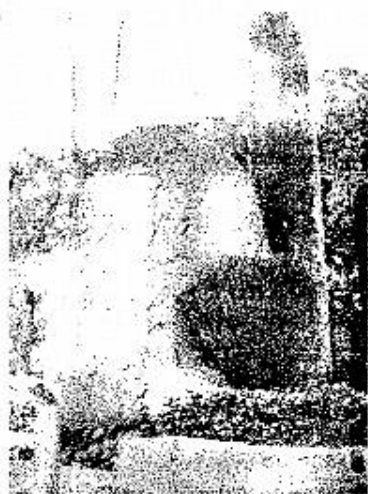
・草加せんべいの本家本元を全国にPRしようと、草加煎餅協同組合と草加地区手焼煎餅協同組合の二つの煎餅組合が、市民から募金をつのって平成四年に建立された。

・左にせんべいに見立てた円形の花崗岩（高さ3.3m）、右にせんべいを焼く箸に見立てた御影石（高さ5.7m）が置かれている。

○草加せんべいのルーツ

・草加せんべいのルーツにはいくつかの伝説があるが、その代表的なものは、日光街道草加松原に旅人相手の茶屋があり、おせんさんのつくる団子が評判だったということによる。

・おせんさんは、団子が売れ残ると川にすてていたが、ある日、それを見た武者修行の侍が「団子を捨てるのはもったいない、その団子をつぶして天日で乾かして焼餅として売っては」と教えた。おせんさんが早速売り出したところ大評判になり、日光街道の名物になったといわれる。



せんべい発祥の地碑

河合曾良像

○河合曾良

・江戸時代の俳諧師（一六四九〜一七一〇）河合惣五郎を名乗る。松尾芭蕉の「奥の細道」における奥州・北陸の旅に同行した弟子で、蕉門十哲の一人。

・「随行日記」

曾良は旅の旅程・旅の動静・天候・旅館一覽など克明に記している。昭和18年、原本をもとに山本安三郎が「曾良 奥の細道随行日記 附元禄四年日記」と題して翻刻した。

○河合曾良像

・平成二十年（市制五十周年記念）、建立協賛者が彫刻家、妻倉忠彦氏に依頼し、曾良の人間性・人生観・芭蕉を支える脇役としての生き方を主題に建立。

・銅像の裏側

「曾良は河合氏にして惣五郎と云えり。このたび松しま・象潟さむかたの眺、共にせん事を悦び、且は瀧旅の難をいたはらんと。」



河合曾良像

綾瀬川の舟運

あやせがわ しゅうりゅうん

- ・綾瀬川はかつての秩父盆地からの旧荒川の本流であり、慶長年間以前は、大型の舟も運行可能な大河であった。
- ・伊奈氏により綾瀬川上流が締め切れ水位が下がり、安定した河川になって舟運や新田開発が可能になった。
- ・江戸への年貢米の輸送のため、延宝年間（一六八〇）に花又から小菅への直線ルートが開削され江戸への直線コースが開かれた。同時に川の堰止め禁止令が出され、これが舟運隆盛の基礎となった。

（元荒川などは河川途中に用水堰があった。）

- ・大正二年の商品リスト

（上り荷）大豆粕・鯀粕・機械油・陶器・塩・人造肥料など

基本的には下肥が中心と思われる

（下り荷）圧倒的に米・小豆・甘藷・糠・木材・炭など

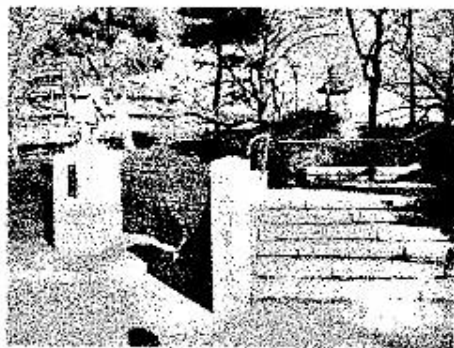
- ・鉄道開通以前の昭和三十年代まで続いた。

ふだばかしこうえん

札幌河岸公園

- ・昭和54・56年の台風によって激甚災害に見舞われ、再三の改修・排水機場等の治水事業が実施された。
- ・この改修事業が水害の無い安全で快適なまちになることを祈念し、昭和59年に札幌河岸公園が完成された。

札幌河岸公園



札幌河岸

ふだばかし

- ・天和三年（一六八三）綾瀬川開削の時に設けられる。
- ・河岸とは川を利用した舟運に使われていた船から荷駄を積み下ろしする場所のことをいう。

- ・天和三年（一六八三）綾瀬川開削の時、設けられる。

- ・札幌河岸はもともと甚左衛門河岸といい、野口甚左衛門が特定な者に請け負わせて運営にあたる高瀬（川底の浅い）の私河岸であった。

- ・野口甚左衛門家の屋号が「札幌」であり、安政大地震により甚左衛門河岸脇へ移転したことから、やがて札幌河岸とよばれるようになった。

- ・野口甚左衛門は、もとは草加宿の一番はずれ、現在の神明神社の隣の割烹八百梅、おせん公園や道路反対側の河合曾良像のあるあたりに住んでいて、高札が設置されていたので、屋号は「札幌」と呼ばれていた。

- ・左写真の河岸場は平成元年から三年にかけて整備された。

札幌河岸



まさおかしきくひ
正岡子規句碑

・【正面】

梅を見て

野を見て行きぬ

草加まで

・【裏面】

俳人、正岡子規が草加を訪れたのは、明治二十七年三月、高浜處

子とともに郊外に梅花を探る吟行の途次である。

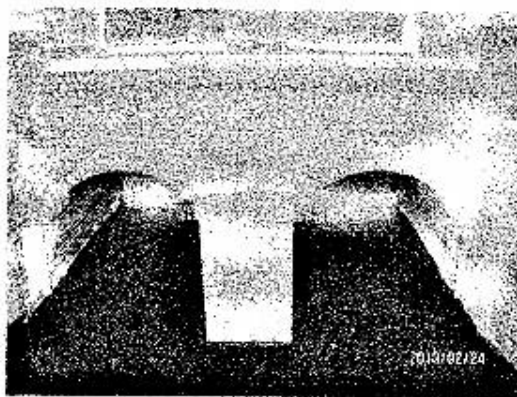
このときの紀行文である「発句を拾ふの記」によれば、上野の根岸から草加まで歩き、茶店に休息を求め、昼食をとり、再び去った。

そのわずかな有縁を証す詠句は、文芸の街を傍称する草加にとって貴重な作品である。(平成五年立)



正岡子規句碑

甚左衛門堰



じんざえもんせき
甚左衛門堰 (埼玉県指定文化財)

・ 札幌河岸のそばにある甚左衛門堰は、洪水時に綾瀬川から伝右川(伝右衛門川)に逆流する水が田畑を侵すのを防ぐための堰で、かつては木造の堰であったが、明治27年に煉瓦造りに改築された。

・ 甚左衛門堰は、建設当初の姿をよく残し、保存状況が極めてよいなどの理由から、平成11年に埼玉県の指定文化財となった。

・ 明治27年から昭和58年までの約90年間使用された二連アーチ型煉瓦造水門の煉瓦は、横黒煉瓦(鼻黒・両面焼煉瓦ともいう)を使用している。

・ 札幌河岸のような河岸遺跡と煉瓦造水門が共存するところは、草加以外には見られない。

・ 煉瓦の積み方は、段ごとに長平面と小口面が交互に現れる積み方で、「オランダ積」あるいは「イギリス積」と呼ばれる技法を用いている。

・ 煉瓦造水門「甚左衛門堰」は、古いタイプの横黒煉瓦を使用しており、建設年代から見てもこの種の煉瓦を使った最後期を代表する遺構である。

・ 建設当初の姿を保ち、保存状態が極めて良く、農業土木技術史・窯業技術史でも貴重な建造物である。

望楼

- ・望楼とは、遠くを見渡すための櫓（たぐら）のことをいい、常に見張りを置いて、町なかの火事発生の発見に努めるための施設であった。
- ・この望楼は、石垣の上に埼玉県産のスギ・ヒノキを使った木造の五角形の建築物で、高さは11mあり、内部は螺旋階段になっている。

松尾芭蕉像

まつおぼしやうぞう

- 松尾芭蕉（一六四四〜九四）
- ・江戸前期の俳人。伊賀上野の城東、赤坂で生れる。士分待遇の農家の出身。父は松尾与左衛門。幼名は金作。のち、藤七郎、忠右衛門、甚七郎。俳名は宗房、桃青を経て芭蕉を名乗る。
- ・藤堂藩に仕え、俳諧を学ぶ。
- ・のち江戸に下り俳壇内に地盤を形成、深川の芭蕉庵に移り独自の蕉風を開拓。晩年は俳諧本来の庶民性に戻り「軽み」の俳風に達する。
- ・一六九四年大阪で客死（かくし）（旅先死）。

○「奥の細道」の旅

- ・元禄二年（一六八九）、46歳の芭蕉は、門人曾良を伴い、奥州に向けて江戸深川「芭蕉庵」を旅たつ。
- ・深川から千住大橋まで舟で行き、そこで見送りの人々に別れを告げて歩み始める。
- ・この旅は、草加から日光、白河の関から松島、平泉、象潟（ぞうがた）、出雲崎、金沢、敦賀と東北・北陸の名所旧跡を巡り、美濃国大垣に至る600里（2,400km）、150日間の壮大な旅である。

○「奥の細道」「草加の条」

- ・三月二十七日、芭蕉一行は千住宿から2里8町（8.8町）を歩き宿駅草加にたどり着いた。

第一日目の最終目的地、すなわち宿泊地は、下記の文では草加宿とうけとられるような書き方になっているが、曾良の「随行日記」では、「二十七日日夜 カスカベニ泊ル」とあることから、実際は粕壁宿である。

草加の条

ことし元禄二とせにや 奥羽長途の
行脚 只かりそめに思い立ちて
異天（異郷）に白髪（しらげ）の恨を重ぬとい
へ共 耳にふれていまだめ（目）に
見ぬさかひ（境川地） 若生（わかぎ）て帰ら
ばと 定なき頼（たより）の末をかけ 其日（そのひ）
漸（おそ）早加と云宿（いさ）にたどり着（き）にけり
瘦骨（しうこつ）の両にかへれる物

先くるしむ

只身（ただみ）すがらにと出立侍を 帯（おび）子（こ）一
衣（ひとえ）（紙子一着）は夜の防ぎ ゆかた、
雨具（あまがし）・墨筆（すみふで）のたくひ ある（い）は
さりがたき銭（ぜに）などしたるは さすが
に打（うち）（ち）捨てがたくて 路次（ろじ）の煩
となれるこそわりなけれ（仕方がない）



松尾芭蕉像

像は、友人や門弟たちの残る江戸への名残を惜しむかのように、見返りの旅姿をしている。

日光街道の碑

〔正面〕

日本の道百選

日光街道

埼玉県知事

〔裏面〕

この道は江戸時代の五街道の一つで、奥州日光道中とも呼ばわれ、江戸と日光・奥州を結ぶ重要な街道であった。

街道の名所として親しまれてきた松並木は草加の千本松原といわれ、現在にはふるさと埼玉を代表する歴史的文化的象徴となっている。

綾瀬川と一体となった水と緑の美しい景観をもつ道として此の度、「日本の道百選」に選定された。

昭和六十二年十一月十五日

草加市長 今井宏

草加松原（千本松原）

そうかまつばら

○街道と松並木

徳川家康は、幕府開府に先だつて五街道をはじめとする全国の街道の整備を命じている。

日本橋を起点とした街道沿いには、箱根や日光のように、杉や松が多く植えられ、並木として壮大な景観を今に伝えている場所がある。

幕府が街道に並木を設けたのは、常緑の並木が「夏は強い日差しを遮り、冬は防風にと参勤交代などで道ゆく旅人たちを守る」こと、街道の風致をもとめたことにあつたといわれる。

○草加松原の今昔

- ・天和年間（一六八一〜一六四四）に関東郡代伊奈半左衛門が綾瀬川を開削したときにあわせて、日光道中を改修した際に植樹したと。
- ・寛延四年（一七九二）に1230本の苗木の植樹が記されている。
- ・文化三年（一八〇六）完成の「日光道中分間延絵図」には、街道の東西に数多くの松が描かれている。
- ・明治二年の調査では485本、最大高さ12間とある。
- ・明治十年の調査では806本とある。
- ・昭和三年の記録には778本、最大高さ12間、距離1.4とある。
- ・昭和八年、西側の松並木を伐採して4号線の拡幅工事があつたが、並木の保護を求め、下り線を新たに新設させ、松並木を守つた。
- ・昭和四十年代には、排気ガスの影響で、成木60本まで減少。
- ・昭和四十六年、「松の枯死の原因究明と対策」で、車道上り線を西側に移動させ、現在約633本まで回復している。
- ・昭和六十年から、県と共同で現在の遊歩道が整備された。



千本松原

昭和62年

草加松原で採取された黒松の種子1万粒が、姉妹都市の米國カリフォルニア州カーソン市にプレゼントされた。

● やたてはし 矢立橋

○矢立の初（吟の書き初め）

行春や 鳥啼魚の 目は泪

（厳寒の冬は身にこたえ、それだけにうららかで花咲きそろう春は格別である。その春が行ってしまうのだから、鳥までもわびしきで泣いているように聞え、魚も目に涙を光らせているように思われる。）

芭蕉はこの句を初めとして足を踏み出す。

○矢立橋

・奥の細道「是を矢立の初として、行道なおすまず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる返はと見送るなるべし」にちなんで名付けられた。

・百代橋と対をなす和風の太鼓橋で、高欄部分は鋳物製で木目模様を浮き立たせている。

・平成6年完成 長さ77.9m 巾3.5m



矢立橋

● ハープ橋

・松原遊歩道と綾瀬川左岸広場を結ぶ橋。

・橋干にはその名の由来となったハープをかたどった小さなブロンズ像が18体据えられている。世界各国の著名なハープ奏者を招き「国際ハープフェスティバル」を開催するなど、音楽と文化のまちづくりを進めていることから名付けられた。

・平成7年、かつてのトロッコ橋を現国土交通省が架け替えた。

ハープ橋



トロッコ橋（大阪窯業橋）

大正10年頃、大阪窯業（レンガ工場）がトロッコ用に架けた橋。5年後改築され永久橋に。当時工場内にはトロッコ用の線路が10%分も敷かれ、数百台のトロッコが走っていた。昭和6年、大阪窯業のレンガ出荷のため草加駅と新田駅の間、現在の松原団地のやや南側に草加荷扱所が開設され、同窯業までの引き込み線が敷設された。草加荷扱所は昭和48年に廃止された。トロッコ橋の上には線路が敷かれ、橋脚にはレンガが使われていた。その後、トロッコ橋は平成7年に「綾瀬川リバータウン整備構想」の新たなシンボルとなるようハープをデザインした橋に架け替えられた、ハープ橋と名称を改めた。

● 百水橋 ひやくすいはし

○百水代橋 (永遠) (古くは「はくすい」とも)
「奥の細道」冒頭

はくすい

月日は百水代の過客かかくにして、行かふ年も又旅人也……

(月日というのは、永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、来ては去り、去っては来る年もまた同じように旅人である)

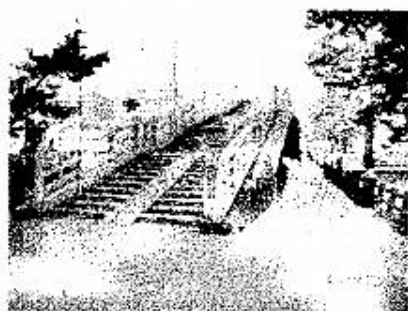
○百水橋代

・昭和六十一年、完成した和風の太鼓形歩道橋。

・昭和六十年から草加松原の歴史的景観を保存するため、県と市が三ヶ年計画で進めていた「埼玉シンボルロード整備事業」の一環として架橋された。

・奥の細道の冒頭「百水代」にちなんで名付けた。

・長さ63.6m 巾3.5m



百水橋代

● 街道沿いの他の名跡

○浅子家の地藏堂 あまこけ じそうどう

草加宿のスタンプ。江戸の豪商・浅子家が子育て地藏尊として祀った。

○回向院 えこういん

法然上人・呑龍上人像が祀られている。

○葛西道道標 かさいみち

草加に残る古道の一つ。

○明治天皇行在所跡

明治九・十四年の二度の巡幸の行在所

○伝統産業展示室

草加市文化会館内

○松尾芭蕉文学碑

「百水橋」の北より。「奥の細道」の草加の章段が刻まれている。

○水原秋桜子句碑

草加せんべいの句をしたためた句碑が中曾根橋のたもとにある。

○しやぶしやぶ池

「草紅葉 草加煎餅を 干しにけり」ドーナツ形をした「水環」という名のモニュメントで、平成四年、水害防止立案を記念して設置。

○芭蕉・河合曾良像壁画

草加松原遊歩道の北端、外環状道の側の壁面に絵タイルで描かれている。

主な参考資料

- ・草加辞典
- ・草加市民俗資料館資料
- ・草加市教育委員会資料
- ・「今様草加宿」解説版
- ・鈴木恒雄氏「綾瀬川河岸場」資料
- ・フリー百科事典「ウィキペディア」
- ・その他諸パンフレット